



らしさ 一廊下を介して“まもる”集合住宅

「個性を守る」とは「個性を受け入れ、活かす」こと。建築において「廊下」は住戸の個性を受け入れ、活かす役割を持つ。本提案では、人間の個性が色濃く反映される住戸同士を廊下で繋ぎ、他者との関係性を見直す「個性を守る」集合住宅を設計した。そして、個性は経年変化するもの。現代・未来に住まう人々は、廊下の幅員・屋根の高低・各部屋の配置から空間に立体感をもたせることで、常に個性の化学反応を起こす。



広い中庭では住人がコミュニケーションをとっている



ホールに惹きつけられ、隣に住まう子供と遊び始める



子供だけが通れる空間、絵が趣味な人を眺める



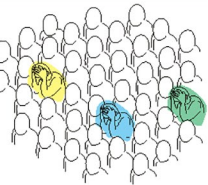
廊下を介して絡み合う



ガーデニングの趣味が他の住人に伝播

01. 私たちの個性を“守る=活かす”

昨今の日本は、人々の個性を尊重する縮図が生まれつつ、未だ個性と向き合う場が少ない現状である。そして、幼少期-成人に至るまで、個性の発現を悪しき風潮として捉える一面がある。



俗にいう「出る杭は打たれる」である。しかし本来は、各人の個性は育まれ、尊重し合うべきと感じる。そこで、私たちの個性を“守る=活かす”空間を建築からアプローチする。

02. 私たちの個性の発現

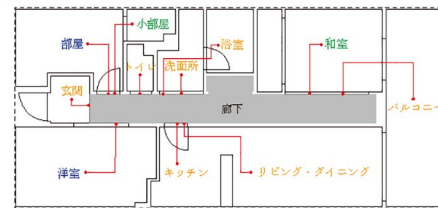
個性は目では測れない濃淡・明暗が様々なかたちで存在している。本提案ではこのことを“色”と捉える。人は複数の個性を掛け合わせて成り立っている（下記、個性獲得フロー図）。各人の獲得した色は、個人で磨き続けることで彩度の高い色味を、他者と関わることで異なる色味を、生み出すはずだ。



個性獲得フロー図

03. 私たちの個性を活かす居住空間

居住空間は廊下・屋根・壁で構成され、閉鎖的な性質を持つ壁を取り除くことが個性を活かすと考える。廊下と屋根は共有・受容的・活動的の3つの空間特性を繋ぎ纏める。



04. 私たちの家族構成

私たちの集合住宅には、様々な趣味を持った4住戸が住まう。皆が趣味に時間を割き、生活を楽しみたいと入居してきた。



05. 廊下における建築的な操作

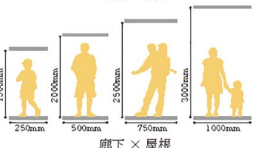
各部屋の持つ個性（機能）を繋ぐ廊下の幅員を操作する。

幅員は、子供1人がギリギリ通れる250mm、大人1人がギリギリ通れる500mm、一般的な廊下750mm、余裕を持って通れる1000mmの構成としている。



廊下の幅員

廊下の幅員に合わせて、屋根を設る。廊下×屋根は250×1500、500×2000、750×2500、1000×3000mmとすることで、空間に立体感を持たせる。

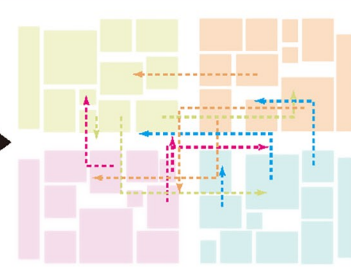


廊下×屋根

06. 居住空間ダイアグラム



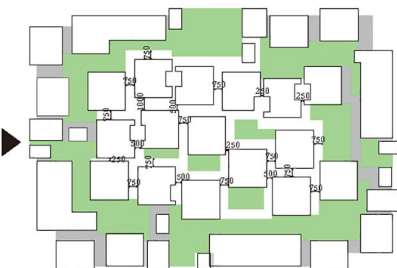
住戸は数多の部屋から構成され、近年は隣人との関係性を外壁で隔てた住居形態である。



共有部屋は四隅に配置、受容・活動的な部屋は拡散させる。



部屋同士を廊下で繋ぐ。他者と遭遇せずとも部屋の移動が可能のように動線も計画する。



廊下の幅員から、各部屋の距離感が定まる。中庭ではアクティビティが偶発的に生まれる。